

## 多神教の神

精霊崇拜 (animism、アニミズム)

兼任恵彬

### ◎精霊崇拜

動物、植物、自然物、自然現象にわたって、それぞれに宿り、それを生かしている精霊があり、その精霊は超人的存在で人間には見ることが出来な  
いけれども、それは物を離れて自由に動きまわる実体で、人間同様、喜怒哀楽の心境を持つといわれている信仰。

祖霊もそうした精霊たちのなかに含まれている。

それゆえ、縄文人はそういった精霊たちのその不思議な力を恐れ敬った。

自然の恵みの中で生きている縄文人は、さまざまな精霊たちと深く交感することができ、ひたすら祈願し感謝すれば、相応の報酬を与えてくれる、と信じていた。

\*精霊≡靈魂：精霊に姿はなく、どこへでも自由に移動でき、そのものと離れても存在でき、そ

れ自身死滅することはない。

↓神という観念

貯蔵穴群、墓地から構成されていた。

墓地を広場の中央に据え、祖先の霊を中心とした生活を営むことで集団の一体感を強めるとともに先祖伝来の土地を占有する正当性を保証しようとした（縄文前期～中期）。

### ◎縄文的思考

①原アジア人（古モンゴロイド）的思考。

②円の発想。

③身分制や私有財産の観念なし

縄文文化的な集落は円形の広場を中心に構成され、広場、居住空間、ごみ捨て場（貝塚）の順で同心円を形成していた。中心の広場は祭祀の場としての聖空間、集会の場、共同作業の場、

縄文社会では極端に突出した階層はなかったが、各種の個人的な能力によるゆるやかな階層（集落のリーダーと役割分担したグループや祭りを司るシャーマン等）、男女の別や年齢別

の階層、生業ごとのグループや出自によるグループなどの区分は存在した。

特に、階層は代々受け継がれて固定する場合もあったらしいが、固定的な上下関係となったり、余剰や特定の原料・設備・技術などを独占し、直接生産に携わらない階層、つまり階級があったとは考えにくい。

食料は共有して公平に配分した。

一人ひとりにはほぼ同じ大きさの墓  
或いは埋葬の場所が用意されていた。

#### ④ 自然との共存

自然界のあらゆる事物には霊的な力や生命力が秘められており、それらの力を生活に取り込もうとする自然観を持っていた。↓マナイズム

縄文中期には雑穀やイモの栽培が始まり、縄文後期には稲作も伝わった。しかし、農耕を重視せず、魚介類を主食にした。

季節に従って移り変わる自然の恵みのままに自然と共生していた。

#### ⑤ 生まれ変わりの発想

すべての生き物は神の持ち物だから

ら、亡くなった人の遺体を神に返すことで、再び新生児となって再生してくと、また動物もきちんと葬られることにより、生まれ変わって新たな獲物になると考えた。そして人間も自然の一部と考え、遺体も動物の骨などと共に貝塚に葬った。生前使っていた食器や装飾品などの副葬品も死者と共にあの世に送られると考えていた。また子供の再生を願って、土偶（祭器の一つ、集落の巫女の姿を形どったものと思われる）を祭り、願いがかなった時はそれを壊して神のもとへ返した。

## ⑥死霊崇拜

人間も死ぬとその霊が生者に災いや福をもたらすと考え、死者の霊「死霊」や祖先の霊「祖霊」を祀った。そしてそれらの霊に神を招き、また鎮めるために祭りや呪術を行った。しかし先祖を「祖先神」として祀る習俗は持たなかった。